

東京都済生会向島病院

看護部長 佐久間 あゆみ

テーマ：今年の社会動向における自施設の取り組み

2020 年度、東京都済生会向島病院での主たる取り組みは、「新型コロナウイルス」への対応に尽きます。新型コロナウイルスの感染拡大は、人の動き・働き方、そして経済・教育のあり方など様々な変化をもたらしました。医療機関において、新型コロナウイルス感染患者の受け入れ可否の判断はとても大きな決断でした。感染症患者受け入れについての判断を迫られた 2020 年の 1 月、まだまだ不明確なことも多く、感染症（疑いを含む）患者を受け入れることへの反対意見もありました。また導線や人員配置、院内感染予防の観点から使用可能な病床は限られ、病床稼働の低下は明らかでした。他にも風評被害、院内感染への懸念もさることながら、自分達が感染することへの恐怖心など、反対理由も多岐に渡りました。そんな中、4 月から感染症患者の受け入れを進めることができた裏には、地域のために済生会病院としての使命を果たすという院長の強い想いと、それを支える職員の行動力があったからだと思います。1 年を通して様々なことを計画し実践してきました。その中で、一部ですが以下の 3 つの視点でご紹介したいと思います。

1) 入院患者の療養環境の変化

複数の医療機関で院内感染が報道された春、当院においても院内にウイルスを持ち込まないために、職員の体調管理・入院患者のスクリーニングや一時的な隔離といった様々な対策が行われました。その中でも入院患者にとって大きな変化は「面会禁止」ではないでしょうか。当院は 75 歳以上の方がおよそ 6 割を占めます。入院という環境の変化にうまく適応できない方や、退院に向けて家族の関わりが必要な方だけでなく、これまで当たり前のように行えていた面会が制限されることで、家族の不満も強くなっていました。そこで、当院では 10 月より遠隔の面会システムを導入。予約制でかつ院内の所定の場所に家族に来ていただく必要はありますが累計 12 名の方が活用されました。他にも、外出・外泊の制限、患者さんのマスク着用など、入院生活をおくられる患者さんも、私たち同様に制限がかかっていると感じています。

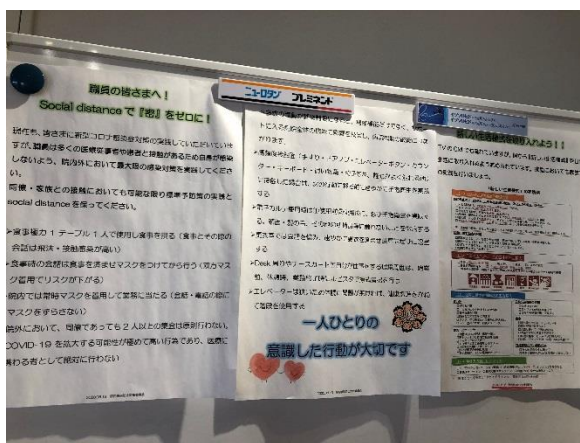


2) 職員が抱える不安への対処

感染症患者の受け入れ準備として、導線の確認・対応マニュアルの整備・感染予防の備品確保を進めながら、各部門の責任者と話し合いを繰り返しました。職員へ間違った情報が伝わることを避けるために、責任者と納得がいくまで質問に答えました。職員の多くは、「新型コロナを受け入れる」→「院内感染が起こる（自分達も感染する）」→「風評被害で患者数が減る」→「経営が悪化する」→「給与やボーナス

が減らされる（人員削減）」というネガティブな思考へ発展し、「新型コロナを受け入れる＝職員のことを考えていない」という論調になってしまいそうな時期もありました。

そこで、感染症に関する情報提供（気をつけるべきこと）を行うと同時に、病棟再編と職員の意向調査を行い、職員の気持ちを一人一人直接確認しました。もちろん事前に、想定される人数の計算をしていました。実際に予測した人数が集まるという確信があったわけでもありませんでしたが、最終的には必要な人員を集めスタートすることができました。確定的な情報が乏しい時期に、感染者への対応を志願してくれた職員には本当に感謝です。また感染への不安だけでなく経営面についても補助金の情報や見込みなどの情報を提供することも併せて行いました。



3) 院内研修方法の再検討

感染症患者の受け入れ決定、病棟再編の影響と、院内の密を避けるための取り組みは、院内の研修体制や新人育成の場面にも影響を与えました。予定されていた研修の開催方法の再検討や、新人とプリセプターの配置変更に伴い指導の継続も困難になりました。当院は規模も小さく、令和2年度の新人看護師は3名であったため、感染防止に配慮しながら進めることができました。しかし、急な配置変換と部署の移動でプリセプターと配属先が分かれてしまい、数ヶ月は固定した指導者を設けられない状況が続いたことは、負担となったのではないかと感じています。院内研修においては、「本当に集まる必要があるのか?」「個人の作業や学習では目標達成はできないのか?」を再検討しました。対面が必要との判断にいたった時には、参加人数を少なくし開催回数を増やした研修もありました。

来年度に向けて

令和2年度は新型コロナウイルス一色であったことは否めませんが、現在は一部の病棟で日勤と夜勤のユニフォームの色を変えることを通して、時間外勤務の削減にも取り組んでいます。予測されない事態が起こったときの対応も重要ですが、そんな時でも今まで取り組んできたことや解決が必要な事柄にも目をむけ、少しずつでも取り組んでいくことが重要だと考えています。新型コロナウイルスへの対応は、今まで当院を知らなかった方にも、知っていただく機会となりました。また、102床の内科中心の病院であるにも関わらず、積極的に受け入れていく底力を見せることにも繋がったと考えています。そしてあとで振り返った時、自分達が歩いてきた道に胸をはれるように1日1日を積み重ねていければと思っています。